

### ジョイスの時代のダブリン(4)

YUKI, Hideo / 結城, 英雄

---

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

55

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

15

(発行年 / Year)

2007-10-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004439>

## ジョイスの時代のダブリン(4)

結 城 英 雄

### 政 治

#### ブルームと自治

ブルームの一日（ブルームズデイ）は、運命の一日（ドゥームズデイ）である。この日、妻の不義をめぐり、彼は夫としての立場を試練されることになる。だが、読者の予想に反し、彼は何の対策も講ずることなく、妻との馴れ初めを想起しながら、郷愁に浸るだけである。妻の不義の相手であるボイランの姿を見かけると、顔をふせ（6.200）、動転し（8.1191）、寂寥感に襲われる（11.1067）。そして帰宅するころには、妻と愛人の性行為を本能に基づく生物の「自然的行為」（17.2178）にすぎない、と得心してしまふ。彼の一日はどことなく逃避的に思われる。

ブルームがまったく無抵抗であるというわけではない。彼の面目躍如たるところは、バーニー・キアナン酒場での「市民」との論争にもうかがえる。「民族とは何か」（12.1419）と問う「市民」に向かって、「民族というのは同じ場所に住んでいる住民です……だが異なる場所に住む場合もあります」（12.1422）と答えている。周囲の者たちはこの稚拙な発言を嘲笑うが、彼の定義は柔軟である。そこには移民の息子である彼自身のみならず、イギリス系アイルランド人も、海外への移住者も含むことができる。アイルランド人は様々な人種の複合であり、一枚岩的な定義では包摂できない。狭隘な民族主義に対するブルームの自己主張の瞬間である。

さらにブルームは、イギリスに力で抵抗しようと主張する「市民」たちに対し、「力、憎しみ、歴史、そんなものはみんな。男にとっても女にとっても大事なものじゃない、侮辱や憎しみなんか」（12.1481）と暴力を否定し、憎しみの反対である「愛」（12.1485）を説く。基本的に彼は平和主義者であり、後ほどステイーヴンに自らの見解を繰り返す、こう語っている。「ほくはどんな形のものだろうと暴力とか不寛容とかが大嫌いなんだ。そんなものは何を生む力も何を阻止する力もない。革命だって整然と分割払い方式でやらなきゃ駄目なんでね。ちょっと向うの横丁に住んで違った方言をしゃべるからって、いわば隣人同士がそんなことで憎みあうなんて愚の骨頂だよ」（16.1099）。

ブルームに主義主張があるわけではない。民族をめぐる彼の発言も外来者としての出自に由来するものであるし、また彼の非暴力論にしても妻の浮気相手に毅然とした態度が取れないことに起因している。にもかかわらず、彼の意識は時代の政治と繋がっている。独立運動（home rule）の高揚期のこと、アイ

ルランド人のアイデンティティが問われ、自治権獲得の道が模索されていた。そしてそのイデオロギーは夫婦の関係をめぐる家庭 (home life) の力学とも無縁ではない。イギリスとアイルランドの関係は結婚という比喻で語られることが多かったのである。

ひるがえって、1800年8月に連合法が可決され、翌1801年1月からイギリスとアイルランドの連合が実施された。アイルランド議会は廃止され、アイルランド選出議員はロンドンのウェストミンスターに吸収させられた。アイルランドはこれまでも総督府を通して統治されており、行政や司法の点でその後も変わるところはなかったが、連合はアイルランド人が自らの権利を主張する場を放棄したに等しい。その後のアイルランドの課題は、この失策を修復し、イギリスから再び自治を獲得することであった。連合は「失敗した結婚」と呼ばれている。

こうして多くの民族主義者が立ち上がった。だが自治権獲得の運動は錯綜とし、内部対立や裏切りもたえなかった。一般的に、プロテスタントが連合を支持し、カトリックは連合撤廃を唱えたが、プロテスタントでも連合に反対する者もいたし、逆にカトリックでも連合を支持する者もいた。また自治権獲得の方法をめぐる意見の対立も起こり、ダニエル・オコネルやチャールズ・スチュアート・パーネルといった政治家は合憲的な手段に訴え、逆に青年アイルランド党やアイルランド共和兄弟団などの過激派は武力行使を説いた。激動の時代であった。

そうした背景の下、ブルームも政治家になろうと思ったこともある。彼が心酔したのはパーネルであり、1870年代から80年代にかけての土地同盟や自治権要求運動の展開に大きな関心を持ち、1890年の不義密通事件には同情した。その後、1899年にボーア戦争が勃発すると、学生に混じり急進的な帝国主義者、チェインバレンを弾劾するデモに加わった。またごく最近では、アーサー・グリフィスにめぐり合い、ハンガリーの独立の方法を示唆し、彼の理論に影響を与えているといった噂も広まっている。アイルランド史を振り返りながら、政治という観点よりブルームの状況を眺めてみたい。

## ダニエル・オコネル

アイルランド史をひもとくとき、まず銘記しておくべき人物の一人がダニエル・オコネル (1775-1847) である。「解放者」と呼ばれ、その名を称えられている。イギリス支配下のアイルランドにおいて、カトリックには様々な制限が課せられていた。議員になることや公職に就くこと、教育を授けること、5ポンド以上の馬を保有すること、土地を購入することなど、すべて禁止されていた。これはカトリック刑罰法と称された。その撤廃に奮闘した人物がオコネルである。ダブリンのメインストリート、オコネル通りは彼の名にちなむ。

オコネルは、ケリー州の小地主の息子として生まれ、法律を学び、弁護士になった。そして1823年、カトリック教徒の全国組織であるカトリック協会を設立し、カトリック解放の要求を英国政府に突きつける。教区司祭の後ろ盾もあり、月1ペニーという会費に多くのカトリックが同志となった。こうした大同団結の前に、弾圧で対処できないことを予測した英国政府は、1829年、カトリック解放令を可決する。その結果、カトリック教徒もようやく基本的権利が認められることになる。カトリック刑罰法は

1829年に撤廃される以前にも部分的に緩められていたし、その抜け穴もあったが、その苦難の歴史は長く深刻な問題を孕んでいた。オコネルの果たした功績は大きい。

オコネルは翌1830年に議員になり、今度はアイルランドの自治権獲得のため、連合法撤廃に取り組む。そのため、彼は1840年に連合撤廃協会を設立し、1841年から43年にかけては何十万人もの大衆を動員する「怪物集会」を開催して民族の情熱を示威した。スティーヴンの目にもオコネルは精神的な父と映っているらしく、「マラムストに、諸王のいたタラに、大群衆がつどう。入口のある耳が何マイルもつづく。民衆指導者の言葉が吠え、四方の天風に乘って散った。民衆はその声のなかに身を寄せた」(7.880)とその威風を想像している。

オコネルはアイルランド人をカトリックと規定したが、奴隷制度廃止論の立場からアメリカ合衆国への訪問を拒否し、さらにユダヤ人の解放を支持していた。彼は英語を日常語とすることに賛同し、教会と国家の役割の相違についても意識していた。その現実的な姿勢については、ショーン・オフエイロンが『乞食の王』(1938)で褒め称えている。闊達な時代を画した政治家であった。折しも大飢饉がアイルランドを襲い、社会を根本から覆すことになった。時代の転換期であったのか、彼は1847年2月に下院で大飢饉に苦しむアイルランドのための援助を疲弊した声で訴え、同年5月にイタリアのジェノヴァで他界した。

### 青年アイルランド党 / I R B

オコネルの後、「青年アイルランド党」と称するグループが、機関紙『ネイション』を刊行して民族運動に乗り出した。トマス・オズボーン・デイヴィス(1814-45)、チャールズ・ギャヴァン・ダッフィ(1816-1903)、ジョン・ミッチェル(1815-75)、ジェイムズ・フィンタン・ローラー(1807-49)たちである。彼らは、連合撤廃協会から出発しながらも、イギリス政府との交渉により自治を達成しようとしたオコネルの「老人アイルランド党」と袂を分かち、自らの道を模索した。宗派を超えた平和の印であるアイルランドの3色旗はこの時代に生まれたものである。

デイヴィス(12.916)は、「緑は赤より上なんだ」(15.4517)や「今ひとたびの建国」(12.891)といった新鮮な詩を発表し、アイルランド民族をアイルランドに居住するあらゆる人と定義した。ダッフィはアイルランド議会党の方向を理論的に語った。ミッチェル(17.1648)は実力行使を主張して『ネイション』から分離し、1848年にもっと過激な『ユナイテッド・アイリッシュメン』を創刊して投獄された。ローラー(17.1467)は土地国有化政策を民族運動の原点にすべきことを主張した。こうして彼らは内部分裂し、その一派は1848年に無謀な蜂起を企て、投獄や亡命を余儀なくされた。だが、青年アイルランド党は、多くの記録を残し、後世の人々に影響を与えている。

青年アイルランド党の1848年の蜂起に参加した若き同志には、ジェイムズ・スティーヴンズ、ジョン・オハモニー、チャールズ・キッカム、ジョン・オリアリー、トマス・クラーク・ルービー、マイケル・ドヘニーがいた。そして1858年3月、彼らはジェイムズ・スティーヴンズを指導者として仰ぎ、アメリカでの活動と連帯する最も強力な秘密結社、「アイルランド共和兄弟団」(I R B)を組織した。アメ

リカでのその補助組織名を借用して、「フィニア会」と呼ばれることもある。1867年には、南北戦争に参加したアイルランド系兵士の援助を期待して蜂起を企てたが、事前に情報が漏れ失敗に帰した。また1882年5月6日には、その分派である「無敵革命党」(5.378)が、着任したばかりのアイルランド長官フレデリック・キャヴェンディッシュと次官トマス・ヘンリー・バークをフィーニックス公園で暗殺(7.632)し、パーネル失脚の遠因を作りもした。

アイルランド共和兄弟団は、内部分裂や過激な活動や他派との抗争などにより、勢力を弱めたが、1884年以降にはゲール体育協会のメンバーの加盟もあり、1916年の復活祭蜂起では中心的な役割を担った。そのためアイルランド共和兄弟団は一般の人々にも知られ、スティーヴンはディージー校長にその一員と誤解されている(2.272)。出身校であるユニヴァーシティ・コレッジに民族主義者が多かっただけでなく、彼がフランス帰りでもあるからである。ケヴィン・イーガン(3.164)のように、パリに亡命する民族主義者も多かった。

#### チャールズ・スチュアート・パーネル

ところで、1867年のアイルランド共和兄弟団の蜂起は、イギリス政府にとり驚きであった。大飢饉以降、アイルランドは繁栄を続け、不満がくすぶっているとは思われていなかったのである。そこで1868年の総選挙の結果、自由党が政権を取ると、党首グラッドストーンは、「わたしの使命はアイルランドを平和にすることである」と宣言し、アイルランド教会の国教会制度の廃止、小作人の権利を守る土地法、カトリックの中等学校や大学への助成金といった問題に矢継ぎ早に取り組んだ。

にもかかわらず、自由党の政策は1869年の国教会制度の廃止を除き効力を発揮することがなかった。1870年の土地法の改革も不満足であったし、1873年の教育改革案は彼の失脚を招いてしまった。こうして1874年に総選挙が行われ、ベンジャミン・ディズレイリの保守党が政権を担当することになる。彼は前任者のグラッドストーンに反発し、アイルランド問題を無視することにした。彼の唯一の譲歩は、カトリックの教育問題をめぐり、1878年に成績に応じて助成金を支払う中間教育令を公布し、また1879年に大学の学位授与機関である王立大学を設立したことである。そのうえ、保守党は過半数を維持しており、アイルランドの議員は機会を捉えることができないでいた。

こうした政界の状況を背景に、彗星のごとく現われたのが、チャールズ・スチュアート・パーネル(1946-91)である。そしてアイルランド問題に議会の注意を向けさせるため、議会妨害主義の戦略を徹底した。彼はウィックロー生まれのイギリス系アイルランド人で、1875年に若くして国会議員になった。1879年から82年にかけての土地戦争のときにはアイルランド土地同盟の総裁として農民運動を指導し、その後は国民党党首としてアイルランド自治権獲得の運動を推進した。ほどなく「無冠の帝王」(16.1496)と呼ばれ、アイルランドの頂点に立つ人物になった。

土地同盟はマイケル・ダヴィットと共に始めた運動である。大飢饉以降、繁栄を続けていた農村も、1877年から不況の波に襲われ、1879年には飢饉が再来しそうに思われた。そこで、ダヴィットとパーネルは土地同盟を設立し、農民の救済に乗り出した。アイルランド共和兄弟団のダヴィットは、農民の支

援を取り付けるのがアイルランド独立への道につながると確信していた。同じくパーネルも、土地同盟が自治権獲得の運動に資することを理解していた。同盟が飢饉の再来を防ぐ役割も果たした。

ちなみに、アイルランドの農民は人口の約4分の3を構成していた。1876年の調査によると、地主は約1万人であり、小作農は60万人であった。そして地主のうち750人が大地主で、アイルランドの土地の半分を所有し、国内に住む居住地主と、イギリスに暮らす不在地主がいた。残りは小地主で、平均2,000から5,000エーカーの土地を所有していた。また小作農も、100エーカー以上の土地を借りている約3万人の大農家、50から100エーカーの土地を借りている大多数の中農家、15から50エーカーを借りている約10万人の小農家に分かれていた。さらに土地を借りられずに大地主や大農家の下で働く労働者も多くいた。

問題は1エーカーあたり平均1.5ポンドの小作料であった。小作農の多くはその料金を支払うため、畑を耕作する以外に季節労働に携わったり、海外に移住した子供からの送金に頼っていたが、農業不振の1879年には1,238人が、さらに1880年には2,110人が小作料を支払えず土地から追放された。土地同盟はそうした小作農を救助するための組織であった。短期的には小作料の軽減と小作農追放の停止、また長期的には地主制度の全面的な廃止を実現し、いずれは小作農も国家の助成により自作農になることを目指した。そして青年アイルランド党のダフフィの戦略に倣い、小作農を守るための3F運動（小作権の安定、公正な地代、小作権売買の自由）を展開した。特に1880年10月には、不在地主のボイコット大尉の土地の収穫を小作農に拒否させるなど、その力を発揮した。「ボイコット」という言葉はこの時に生まれた。土地同盟はアイルランドの「政府」のような存在であった。

同時に、自治権獲得運動もグラッドストーンとの提携で進められた。1880年の総選挙ではグラッドストンの自由党がまたしても勝利し、パーネルもアイルランド自治党の党首になった。81年にはグラッドストーンとパーネルの土地同盟が対立し、82年には無敵革命党によるアイルランド長官フレデリック・キャヴェンディッシュと次官トマス・ヘンリー・パークの暗殺があり、必ずしも明るい情勢ではなかった。だが、グラッドストーンは、アイルランド問題の解決はアイルランド自治を法制化することである、との立場を貫いた。

そして1885年の選挙においては、パーネルの自治党が圧勝した。国民同盟へと発展的解消を遂げた土地同盟が、彼の選挙母体になっていたのである。翌年、グラッドストンの自治法案は下院で葬り去られ、彼の自由党も選挙で大敗を喫したが、自由党とアイルランド自治党の連合は、アイルランド自治の必要性を人々に理解させることになったし、その後も存続することになった。パーネルの出現はアイルランド国民に明るい展望を与えていた。

パーネルの失脚はそのような栄光の只中でのことであった。オシー夫人とのスキャンダルをめぐる離婚訴訟が起こったのである。国民党の議員でもあった夫のオシー大尉が、1889年12月24日、パーネルとの不義を理由に妻を告訴し、翌年11月15日に審問が行なわれ、2日後の17日に離婚が認められた。パーネルとオシー夫人との関係は、1886年5月24日にイギリスの『ペル・メル・ガゼット』紙で暴露されたこともあり、10年近く続いている半ば公然の秘密であった。だがオシー大尉の訴訟はパーネルの致命傷

になった。禁欲的なヴィクトリア朝に人々にとって、人妻との密通という事件は相当なショックであり、一大センセーションが巻き起こったのである。

パーネルの国民党は、そうした状況を鑑み、判決が出た直後の 1890 年 11 月 25 日、ウェストミンスター委員会の 15 番 (16.1301) で党首問題を審議し、一旦はパーネル支持で意見が一致する。だが、首相のグラッドストーンや自由党がパーネルに党首を辞任するよう迫り、さらに 12 月 3 日にアイルランドのカトリック教会が彼を支持しないことを表明した。その結果、12 月 6 日、国民党は反対 45、賛成 28 でパーネル不支持を決定した。こうして党は分裂した。反対派の中にはパーネルが最も信頼していたティモシー・マイケル・ヒーリー (7.800) などもいた。

パーネルはこうした反対にもかかわらず、翌 1891 年 6 月にオシー夫人と結婚し巻返しを試みる。だが、思うような展開をはかれず、10 月 6 日、失意のうちにイギリスのブライトンで息を引き取る。病気を気取られないように医者を出ていたのである。享年 45 歳。その遺体は 10 月 10 日にダブリンへと運ばれ、グラスネヴィンのプロスペクト墓地に埋葬される。棺を待つ人々はパーネルに敬意を表して胸に蔦を刺し、以降 10 月 6 日は「蔦の日」と呼ばれる (「蔦の日の委員会室」)。棺が墓穴に降ろされたときには、流星が夜空を横切っていったらしい。墓には彼の生まれ故郷、ウィックロー山地から運ばれた大きな石が据えられている。

パーネルのスキャンダルについての国民の反応は、『若い芸術家の肖像』のクリスマスの晩餐の場面でダンテとケイシーの対立に明らかである。教会の判断に全幅の信頼を寄せるダンテは、教会を擁護し、「地獄の悪魔! ……たたくつぶしてやったんだ!」とパーネルを誹謗する。逆に民族主義に加担するケイシーは、教会が政治に口出ししたことを非難し、「かわいそうなパーネル! ……死んでしまったわれわれの王!」とすすり泣く。これは国民の相対立する意見であり、そこにはアイルランド特有の政治と宗教の確執が反映している。

いずれにせよ、このような屹立した個人の悲劇は、その後のアイルランドという共同体に暗い影を差すことになる。「パーネルを失脚させたのも女だ」(2.394) というディージー校長の言葉に始まり、パーネルという名前は『ユリシーズ』の一日に亡霊のごとく迷っている。サイモンたちはディグナムの葬儀のために墓地を訪れた際に「党首」(6.919) の死を愛惜し、そして第 16 挿話では、パーネル再臨説が囁かれる一方で、パーネル不在のダブリンにおける人々の難破が明らかにされている。ブルーム一家に翳りが見えるのもパーネルの失脚後のことである。

パーネルの悲劇は文学者たちの想像力をも刺激した。ジョージ・ムーア、レイディ・グレゴリー、W・B・イエイツ、ジョージ・ラッセル、ジョン・ミリントン・シングなどいずれも、パーネルの死に救世主の死を重ね、その復活を渴望した。ジョイスもその一人である。評論「パーネルの影」(1912) において、アイルランド人自らの手でパーネルを引き裂いたと怒りを隠さない。このジョイスの言葉はブルームを創造するための背景であったろう。

## 国会議員

ここで当時の議会の状況を整理しておきたい。1801年、アイルランド議会がイギリスのウェストミンスターに併合されたとき、アイルランド選出議員の定数は、上院32名（アイルランド教会の司教4名、世襲の貴族代表議員28名）、下院100名であった。その後、大飢饉によって大幅な人口減に見舞われたものの、アイルランド議員の定数はそのままとされた。国教会制度の廃止に伴い、1871年以降、上院からアイルランド教会の司教4名が削除されただけである。下院では650名中、103名から105名を維持していた。

下院は7年（1911年以降は5年）ごとに改選された。1911年に至るまで、議員には給料が支払われず、自費で半年もロンドンで過ごす必要から、資産家でなければならなかった。また被選挙権は、1868年には21歳以上、評価額8ポンド以上の家もしくは借家に住む男子に与えられていた。これは人口の約3パーセントにあたり、約20万人に相当した。その後、1872年には秘密投票が導入され、1884年には男の世帯主全員、人口の約70万人にまで被選挙権が広げられた。

1801年の連合当時、アイルランド選出の議員はすべてプロテスタントであり、ウェストミンスターの中では少数派でもあった。だが、1829年にカトリック解放令が発令されて以来、カトリックの議員が急速に増加した。1874年の総選挙では、自治を支持するアイザック・バットに賛同したアイルランド議員は59名、さらにパーネル指導の下で勢力の結集が図られ、1880年の総選挙では61議席、そして1885年の総選挙では85席へと躍進した。こうして1880年代半ばには、アイルランドの自治権獲得も時間の問題になっていた。パーネルの失脚はアイルランドにとり大きな痛手であった。

事実、国民党はパーネルの失脚後いくつかに分裂した。パーネル不支持を表明したマッカーシー、デイロン、オブライエン、ヒーリーらはアイルランド国民連盟を設立し、逆に支持派のレッドモンドはパーネルのアイルランド国民同盟を堅持した。しかしアイルランド国民連盟は、ヒーリーの離脱、マッカーシーの党首辞任、オブライエンの統一アイルランド同盟の設立といった具合で壊滅状態にあった。また同じくレッドモンドのアイルランド国民同盟も、国民の支持を得られず弱体化していた。相互の立場を収拾することは不可能と思われ、アイルランドの政治情勢は暗澹たる雰囲気にも包まれた。

それでも世紀末ごろの政治状況は、同時期の文学の「ケルトの薄明」と軌を一にして、「夜明け」のイメージが使用されていた。『フリーマンズ・ジャーナル』の自治の太陽の飾り絵は、「自治の太陽は北西の方アイルランド銀行の裏通りからさしのぼる」(4.101)と、民族主義者のアーサー・グリフィスに皮肉られながらも、そうした時代を映している。レッドモンドを中心に、1900年、統一アイルランド同盟を中核に国民党の結束がはかられたのである。1898年の地方自治法令の成立も追い風となった。イギリス系アイルランド人たち支配階級を中心としていた地方自治が、民族主義者の手に渡されることにもなった。レッドモンドの統一アイルランド同盟も、教区を基礎に地方組織を確立した。

103名のアイルランド選出議員の内訳は、イギリスからの分離を主張するレッドモンド指揮下の国民党が83名、イギリスとの連合支持が20名であった。ダブリン州からは南北の選挙区から2名、ダブリン市の選挙区から6名、計8名が選出されていた。ダブリン市では、ジョーゼフ・パトリック・ナネットイ



(7.75) がコレッジ・グリーン地区から、ティモシー・ハリントン (15.1377-78) がダブリン湾地区から、ウィリアム・フィールド (2.415) がセント・パトリック地区からそれぞれ選出された。トリニティ・コレッジの選挙区からの選出議員が連合支持者であったのを除き、他の地区の選出議員はすべて自治の支持者であった。

にもかかわらず、国民党はかつての威光を取り戻せず、多くの人々が政治に幻滅していた。議員たちは議会の雑事に追われ、国民の現実の生活に無感覚になっていた。彼らは議会でそれなりの成果をあげ、アイルランド経済に潤いを与えたが、アイルランド国民の精神を満足させることはできないでいた。党首のレッドモンドはイギリスの議会、憲法、制度、道徳などに敬意を表し、アイザック・バットと同様、大英帝国へのアイルランドの貢献に誇りさえ持っていた。国民の政治離れは必然であった。

### ダブリン市議会

国の政治を映していたのがダブリン市議会であった。ダブリン市は20の行政区に分かれ、各地区からそれぞれ参事会員（任期6年）1名、一般議員（任期3年）3名の計4名の議員を選出し、総計80名の市会議員で構成されていた。ブルームの住むエクルズ通りは、インズ河岸区に属し、1904年から05年にかけて、参事会員1名と一般議員3名がいた。参事会員と一般議員の資格は、任期以外にはほとんど相違がない。市長は毎年2月にこの80名の中から選ばれた。

市会議員は国会議員を兼任することもできた。フリーマンズ・ジャーナル社の印刷所監督、ジョーゼフ・パトリック・ナネッティ (7.75) は、1904年当時、コレッジ・グリーン選出の市会議員であると同時に国会議員でもあった。1906年から市長を1年間務めたこともある。ジョイスが1902年にパリに旅立ったとき、人物保証書を書いてくれたティモシー・ハリントン (15.1378) も国会議員であり、しかも彼は1901年から3期にわたりダブリン市長も兼ねていた。

市には常設の委員会が8つあり、市議はそのどれかの役員を託され、隔週の火曜日開催の会議に出席していた。「清掃委員会」(16.936)、「舗装委員会」(16.945)、「水道委員会」(17.174) など、それぞれ市の清掃、舗装、水道を担当している。そして委員会の下で働いているのが、書記などの専従の職員である。1900年には100名ほどであったが、その数は急速に増えていった。パット・トービンは舗装委員会の書記であり、その関係でガムリーに市の石の夜警という仕事を与えている (16.945) し、トム・ディヴァンは「浄化委員会」(10.1196) の下で排水工事の仕事を担当している。その他に補助委員会や部会なども託されることもあった。

徴税も市の大切な仕事であった。税金は財産税として課税された。連合税の他、救貧院税、水道料、警察税、下水道税などを含む。執行官がその責任者にあたっていた。なかにはボイルンの父親のような滞納者 (12.1000) もいて、執達吏がその徴収という忌み嫌われる仕事を託されていた。ダブリンの地方税は当初は総督の統治下の地方税徴収事務所で行なわれ、スティーヴンの父親サイモンもその役人であったが、1893年1月、収税吏の仕事はダブリン市に引き継がれ、徴税事務所の役人のほとんどが年金受給者の身分に甘んじるようになった。サイモンも仕事を奪われた一人である。

市議員選挙は政党の争いでもあり、各党の公認候補が競っていた。そして候補者には「推薦人」がいて、その名簿には聖職者が入ることも多かった。また候補者のための「運動員」も必要であった。しかし、政治姿勢が曖昧なままの候補もあり、国民党公認候補でありながら、イギリス国王への姿勢も明らかではないものもいた（「鳶の日の委員会室」）。かつては著名人や弁護士たちが立候補していたが、時代が変わり、一般の人々も自分たちの利益を主張できるようになったのである。そのため酒場経営者や商人など自分の営利のために選出された議員などが半数以上を占め、汚職も蔓延し、政党との結びつきも希薄になっていた。ちなみに、副執行官の意向によって決定される市長選にも汚職の匂いがした。副執行官は1年任期の執行官とは異なり永続的な地位で、有権者の名簿を管理する立場上、市長選にも影響力を有していたのである。

1904年6月16日、市議会では「アイルランド語」のことが論議される設定であるが、議会は混乱している。議場の秩序を保つ式典長のパーネルの兄はチェスに没頭し、守衛長のバーローは喘息を患い、市長も休暇で欠席のため、定足数にも達していない（10.1007）。市議会も麻痺的であった。市民の政治離れは否めない。ブルームもパーネルの兄の姿を見かけ、「わたしは苦しんでいます。偉大な人物の兄貴です。弟の兄貴なのです」（8.508）、と弟の威光の下で押し潰れた兄に時代の変貌を感じている。

## ダブリン城

その一方、アイルランドを実際に支配していたのがダブリン城で、イギリスの統治機関になっていた。頂点に立つのが総督で、イギリスの上院議員を兼任していた。フィーニックス公園の総督邸に住み、国家の代表として様々な式典を挙行していた。しかし、統治の実務を遂行するのはむしろアイルランド長官で、イギリスの下院議員であると同時に閣僚でもある人が多い。そのため長官がアイルランドの行政の実質的な担当者であった。もっとも、長官はロンドンにすることが多く、本当の権力者はダブリンに滞在し、長官の代行を司っていた次官であったと言われている。

1904年当時、保守党が政権党で、アーサー・バルフォアが首相であった。アイルランドの行政の要職は、時の首相の意向で組織されていた。総督はダドリー伯爵ウィリアム・ハンブル・ウォード（年収20,500ポンド）、長官はジョージ・ウィンダム（年収4,500ポンド）、次官はアントニー・マクドネル（年収2,000ポンド）であった。象徴的な存在としての総督は貴族、実権を握る長官は首相の従弟の閣僚、実務担当の次官はカトリック教徒のアイルランド人である。任命にはそれなりの深慮遠謀を感じさせる。

ダブリン城には30ほどの省や委員会があり、長官はそれらの省を監督すると同時に、ダブリンとロンドンを往復し、政府に状況を報告する必要があった。省の中には警察、監獄、行政長官などのような直属のものもあれば、公教育委員会や人口密集地区対策委員会（13.703）のように長官の間接的な司令下にあるもの、あるいは郵政事業のようにイギリス政府の司令下にあり、長官とは無縁の局もあった。下級公務員は試験で選抜されたためにカトリックが多数を占め、逆に上級公務員は任命性のためにプロテスタントが支配的であった。

1895年以降、保守党は「親切にして自治をつぶす」路線を取ってきた。これはアーサー・バルフォア

の考えに発し、アイルランドに経済的な安泰を与えることで、アイルランドの独立運動を懐柔しようとする意図の政策であった。1898年の地方自治体法令、1899年のジョーゼフ・プランケットを担当相とする農業技術教育省の設立、1903年のウィンダム発案による土地買収法など、みなそうした路線に基づく。連合支持者たちからは自分たちを裏切っていると疑われ、レッドモンドら国民党からは国民の独立への意欲が失われはしないかと危惧が持たれた。

言うまでもなく、「親切にして自治をつぶす」政策の目的は、あくまでもアイルランドをイギリスの支配下に置くことであった。保守党はアイルランド事情をよく理解していたのである。そのためアイルランド人よりも、イギリスの議会に責任を担っていたダブリン城の役割は大であった。まさしくイギリスの検閲装置として、有事の折には警察や軍隊を動員できるようその枢軸には連合支持者を任命し、万全な組織の下、巧みな統治を行っていた。

## 警察

警察には二つの組織があった。一つはダブリン首都警察で、ダブリン市およびその周辺の治安維持をこととしていた。もう一つは王立アイルランド警察で、蜂起などを鎮圧するための軍事的な組織として、ダブリン市以外のアイルランド全般を管轄した。どちらも1836年に現行の組織に編成され、どちらもмкаースル・ヤード(10.957)のダブリン城に本部が置かれていた。イギリスのアイルランド支配を示す最も顕在的な標号でもあった。

ダブリン首都警察は、「警視総監」(15.4350)とその補佐役の警視監の監督の下、AからFまでの一般の管区、および情報収集専門の私服のG管区があった。そして各管区は警視、警部、巡査部長、巡査という階級秩序をなしていた。巡査は、職務に情実が入らないようにとの配慮から、「C五七」(10.217)のように管区と番号で呼ばれていたが、成功していたかどうか疑問である。だぶだぶのブルーのズボンをはいていることから、「ブルーバッグズ」(15.813)と呼ばれることもあった。

巡査は地方出身のカトリック教徒が多く、訛りのある言葉使いをし(「恩寵」)、「童顔」(12.576)であると考えられていた。また彼らの最低身長は1.8メートルで目立っていたが、その人数も問題視されていた。ダブリン首都警察の場合、総勢約1,200人、単純計算では市民330人に1人で、他の都市よりも多い。市内の巡回が彼らの仕事であるが、事実上、酔っ払いや娼婦の取締、あるいはトリニティ・コレッジの学生たちの騒乱を鎮圧するぐらいが精々で、ダブリンではたいした犯罪はなかった。ブルームは警官の連隊を見て「気楽な稼業」(8.409)と皮肉るが、彼らの給料の一部(約18パーセント)が市民の税金で賄われていたことも不満の種であった。

密告による金銭の授受があったため(「二人の伊達男」)、多数の密告者がいた。ダブリン城に警察の本部があったことから、密告者は「城の下働き」(「鳶の日の委員会室」)と蔑視され、ジェラルド・グリフインの小説『一味』(1829)の人物に倣って「ダニーマン」(16.1052)などと呼ばれた。実際、アイルランドには密告や裏切りが横行していたのである。ある人物は「フィニア会の連中の……半分は城に備わられていると思うよ」(「鳶の日の委員会室」)と語っているし、スティーヴンも友人である民族主義者のデ

イヴィンに「密告者が必要になったら……この大学で2, 3人は見つけてあげるぜ」と冗談まじりに話している(『若い芸術家の肖像』)。1798年蜂起のフィッツジェラルド(15.4686)は事前に密告され、1803年蜂起のエメット(6.978)は獄中で裏切られている。

王立アイルランド警察についても事情は同じである。この組織は総勢1万人ほどで、アイルランド全土を5つの地区に分割し、各地区の小作人の立退の強行のみならず、地域の情報収集をこととしていた。特にその情報収集能力は有名で、1867年のアイルランド共和兄弟団の蜂起についての情報も事前に入手し、指導部を全員逮捕している。アイルランド警察に勤務するマーティン・カニンガムの語るところによると、ダブリン城当局はブルームのことさえよくわかっているらしい(12.1635)。家族構成、年取、宗教などすべて本部の台帳に記されていた。

ダブリン警察もアイルランド警察も、小作農のカトリックの子弟の就職口の一つでもあった。就任して7年以上経過しなければ結婚できない、昇進が緩やかである、規律が厳しいといった苦情もあったものの、安定した職業であったことに違いはない。こうしてアイルランド人がアイルランド人を取り締まるシステムに組み込まれていった。それにくわえて、アイルランド警察との関係で利益を博した人もいる。これらの人々は「城のカトリック」と呼ばれ、民族主義者たちからは憎まれていた。

## 軍隊

ダブリンは守備隊駐留都市でもあった。兵舎としてはリネン・ホール、ベガーズ・ブッシュ、ロイヤル、リッチモンド、マールボロ、ポートベロー、ウェリントン(6.79)、アルドバラがあった。リッチモンド兵舎はインチコアにあり、スコットランド高地連隊が駐留していた。ポートベローはイギリス軍兵舎で、ダブリン軍事区南ダブリン分隊に本部があった。ベガーズ・ブッシュ歩兵兵舎は1827年に設立され、南ダブリン分隊の一部をなしている。軍隊はアイルランド総督ではなくイギリス本国の陸軍省が管轄していた。ダブリン、コーク、ベルファストの三地域に分かれていた。戦闘服はカーキ色(9.133)であったが、軍服は赤(5.68)であった。ブルームは「赤服。派手すぎる。だから女たちが追いかけるんだろうな」(5.68)とつぶやいている。

1904年当時、アイルランドの駐留兵は約2万人、そのうちダブリンには約5千人が常駐していた。そのため兵隊も市内に点在する風景であった。北岸壁ではイギリスへ帰還する兵士の姿が見かけられたし(「イーヴリン」)、ベガーズ・ブッシュ兵舎の近くに住む人もいた(「対応」)。スティーヴンは、少年のころ父親と連れ立って奨学金をアイルランド銀行に受け取りに行った折にその前に立つ兵士を目撃し(『若い芸術家の肖像』)、今またトリニティ・コレッジの正門でスコットランド高地連隊の楽団に出会い(10.353)、深夜にはイギリス兵士と口論して打倒されている(15.4747)。またブルームも、モード・ゴンたちが娼婦を目当てにオコネル通りに群がる兵隊に抗議したことを想起し(5.70)、ウェリントン兵舎の近くの家でルーディが懐妊された時のことを懐かしむ(6.78)。モリーの恋人のガードナーもダブリン駐在のイギリス陸軍の中尉で、ボーア戦争のために南アフリカに出征している。

軍隊へはアイルランド人もたくさん志願した。ウェリントン(10.532)、ガーネット・ウルズリー卿

(18.691), ゴフ将軍 (15.795) などが有名である。ブルームが郵便局で目にするように、軍人募集のポスターはいたる所に貼られ、貧しい人々を募っていた。インドやベンガルには確かに多くのアイルランド兵がいた。ラッドヤード・キップリングの『キム』(1901)の表題の主人公も、アイルランド兵の子供である。こうしたアイルランド人の入隊を鑑みてか、マーフィと名乗る船乗りは「アイルランドのカトリックの農民が……われわれの大英帝国の背骨なんだ」(16.1021-2)と宣言するが、逆にフィーニックス公園暗殺事件に連座したらしい御者溜りの主人は「どだい帝国と名のつくものは大嫌いだね、それに奉仕するような奴はアイルランド人の面汚しだと思うんだ」(16.1024)と軍隊に敵意を示す。

軍隊については反対論も強かった。1899年から1902年にかけての南アフリカと大英帝国との間の戦いであるボーア戦争の折には、民族主義者から強硬な抗議が起こった。南アフリカにアイルランドを重ね、デ・ヴェット (8.435)らボーア人側に立ち共に戦った者もいた。また1899年12月18日に主戦論者のチェインバレンがトリニティ・コレッジで名誉学位を授与されたとき(8.423)には、モード・ゴンやジョン・オリアリーといった民族主義者たちが反対集会を開いた。スティーヴンもキップリングの愛国詩「心うつけし乞食」(9.125)を揶揄し、スウィンバーンの謡うイギリス軍の南アフリカの「捕虜収容所」(9.134)に敵意を示し、南アフリカのイギリス軍の拠点、マフェキングが二百日余りの包囲に耐えたことを喜ぶイギリスの熱狂的愛国心(9.754)を嘲笑している。

それでも、1829年にカトリック解放令が発令されて以降、多くのカトリックがイギリス陸軍に入隊した。アイルランドにおける軍隊の目的はプロテスタントの利益を守ることであったが、その後イギリスのアイルランド政策も変化し、軍隊をアイルランド支配には行使しなくなっていたのである。しかも入隊したのは貧乏人だけではなく、中流階級以上の家庭の子弟も多かった。軍隊はエリート主義に基づいており、厳しい「試験」や入隊の費用がかかったが、将校への尊崇があった。ボーア戦争で死亡したブルームの友人(17.1251)も軍隊に憧れた一人であるし、マリガンの友人も医者にならず、入隊して将校に変節しようとしている(1.695)。

## 監 獄

法と秩序の象徴が監獄である。アイルランドにおいては、早くも18世紀、大陪審の監督下に40の監獄が存在した。しかし近代的な意味での監獄は19世紀半ば以降のことである。幽閉による自由の剥奪が刑罰になると認識され始めたのである。それ以前の Cromwell の時代には西インド諸島へ、その後はアメリカへ、アメリカの独立後はオーストラリアへと移送されることがほとんどで、蜂起を企てた多くの者たちもそうした運命に甘んじた。こうした変化はその一望監視という構造にも明らかである。ダブリン城を中心に地方へ放射線状に広がるアイルランドの構造そのままである。

監獄としてはマウントジョイ、キルメイナム、グレインジゴーマンなどがあった。キルメイナム監獄は南環状道路沿いにあった。1798年蜂起の政治犯や1803年蜂起のロバート・エメットなどの他、1881年にはチャールズ・スチュアート・パーネルが投獄され、1916年の復活祭蜂起の首謀者たちが処刑された場所である。マウントジョイ監獄は長期の服役囚が入れられるところで、1904年3月27日には妻殺しの

容疑でトマス・バーンが投獄されていた。かつてダニエル・オコネルが一時投獄され、フィニア会の首領ジェイムズ・ステイーヴンが脱獄した南環状道路のリッチモンド監獄は、ウェリントン兵舎の一部になっていた。

### シン・フェイン／社会主義

こうしたイギリスの支配にもかかわらず、アイルランド独立を求める民族主義運動は絶えることなく、秘密結社が組織され、「クロッピー・ボーイ」(11.991)のような民族主義を称える歌も広まった。そして19世紀末、「われら自身に」(1.176)の意のシン・フェインという組織が誕生した。これはイギリスからの政治的・経済的独立を目的としてアーサー・グリフィス(4.101)によって組織され、地下水脈のような潜勢力となっていた。シン・フェインの主張は、1904年にその機関誌の『ユナイテッド・アイリッシュマン』に掲載され、同年『ハンガリーの復活』と題して出版されたグリフィスの著書に明かである。1800年の連合法は違憲であり、オーストリア帝国議会から離脱し、ブダペストに独自の議会を作ったハンガリーに倣い、アイルランドの議員もウェストミンスターから撤退して独自の議会を持つべきであると説いた。

同時にジェイムズ・コノリー(1868-1916)が、1896年、アイルランド社会主義共和党を設立している。1903年にウィリアム・オブライエンのアイルランド社会党に引き継がれ、さらに1909年にジェイムズ・ラーキン(1876-1947)が設立するアイルランド運輸・一般労働組合と協力した。これらの勢力は、1913年9月から1914年2月まで、大規模なロックアウトを敢行した。

こうした勢力が結集したのが復活祭蜂起である。1916年4月24日、パトリック・ピアスを領袖として、アイルランド共和国の独立宣言を布告した。この蜂起が今日のアイルランドを形成したと言われている。実際、1922年には自由国を実現させ、1937年には英連邦から脱退し、さらに1949年にはアイルランド共和国が誕生した。しかしながら、この展開は偶然によるところが大きく、必ずしも最大多数の幸福をもたらすものではなかった。1970年代にいたるまで、アイルランドはむしろ狭隘な国家であった。新国家はゲール語を推進しながら、世界の中の眠れる国となった。それは当時の新聞の状況からも予測できる。

### 新聞

新聞は国民の声の発露であった。主要な新聞はイギリスとアイルランドの連合支持の『アイリッシュ・タイムズ』(発行部数45,000部)、イギリスからの分離・独立を主張する国民党支持の『フリーマンズ・ジャーナル』(40,000部)とその姉妹紙『イヴニング・テレグラフ』(26,000部)、保守・アイルランド教会支持の『デイリー・エクスプレス』(11,000部)とその姉妹紙『ダブリン・イヴニング・メイル』、および国民党支持の『デイリー・インデペンデント』(20,000部)であった。価格は朝刊が1ペニーで夕刊は1ペニー半ほど。

ブルームは死亡広告を読むため、『フリーマンズ・ジャーナル』を買う。ミスタ・ダッフィは保守の『ダブリン・イヴニング・メイル』を読み、彼の入るチャペリゾッド橋の酒場の主人は民族主義者の親派

である『イヴニング・ヘラルド』をめくり（「痛ましい事件」）、ゲイブリエルは連合支持の『デイリー・エクスプレス』に書評を寄せて同僚のアイヴァーズに皮肉られ（「死者たち」）、ドーランは若き日にロンドンで日曜日に発刊される急進的な『レノルズ新報』を読んでいる（「下宿屋」）。さらにブルームは『アイリッシュ・タイムズ』の広告欄で文通相手を探し、民族主義者の「市民」はグリフィスの刊行する『ユナイテッド・アイリッシュマン』などを読んでいる。読む新聞でその人の政治的立場がわかるとも言われた。

だが、新聞はパーネルの失脚とその後の国民党の分裂に伴い、かつての勢いを失っていた。ブルームの勤務先で発行している『フリーマンズ・ジャーナル』も、パーネル支持を放棄後、国民党支持の穏健な立場の新聞に過ぎなくなった。それにくわえ、『デイリー・メール』、『ダブリン・デイリー・エクスプレス』、『モーニング・メール』、『ウィークリー・ウォーデン』など大手の新聞のほとんどが、ギネス一家やアルフレッド・ハームズワースなど体制側の傘下に置かれた。また、「高名な聖職者で時には投稿者」（7.178）の大司教、W・J・ウォルシュなど宗教界からジャーナリズムへの検閲もあった。

そのような状況において、独立を目指す声は「モスキート・プレス」（蚊新聞）で伝達されていた。D. P. モーランの『リーダー』などはその典型である。彼はアイルランドがイギリスから政治的にも、文化的にも、経済的にも完全な独立を達成し、自らの言語、慣習、文化を持つ自治の国家としての地位を獲得することを力説した。そこにはイギリス対アイルランドという二分法しかなかったが、その主張が新国家の政策に取り込まれることになった。

### ブルームへの影響

したがって、このように矮小化した民族主義運動を前に、大多数の人々が政治から離れた。ブルームもその一人である。彼は若き日のように政治に関心がない。グリフィスと交際しながらも一線を画し、「とにかく人間的な魅力が必要なんだ、パーネルみたいに。アーサー・グリフィスなんか正直者だけだと大衆に訴える力ない」（8.462）と厳しい。また民族主義を標榜する人々に懐疑も抱いている。ボーア戦争に主戦論を唱えたチェインバレンに抗議する学生たちを振り返り、「何年かたてば彼らの半数は治安判事や官僚になる」（8.438）と皮肉っている。裏切り者も多かったのである。また民族主義者たちの立場の陥穽にも気づいている。彼らは「市民」のようにイギリスの支配を憎みながら、同時に少数派であるユダヤ人を排斥しているのである。

ブルームの政治への無関心はこうした時代認識による。それはユダヤ人としての苦い人生経験によるところが大きい。だからこそ彼は民族主義にも、体制側にも冷ややかな視線を向けている。しかし、そうした無関心が彼の日常生活を麻痺させていることは否めない。ボーア戦争の折、デモ集会に参加しながらも、「カナダ政府発行の四分利つき（登録）九百ポンド国庫債券（印税免除）所有証書」（14.912）への投資を気遣い、内心ではイギリスの安泰を願っていたらしい。彼はモリーの不義をめぐってもほとんど無抵抗で、昔日のパーネルの面影に若き日の自己を投影するに過ぎない。

しかしブルームはモリーを概念化することはない。「結婚」という比喩で語られたイギリスとアイルラ

ンドの関係も、民族主義の高まるうちに、次第に「不義」という言葉が使われるようになった。国家は女性で表象され、国土へのよそ者の侵入は不義と同義であった。したがって、「一人の不実な女がこのわれわれの土地によそ者を引き入れた……一人の女がパーネルを失脚させました」(2.392)とか、「不貞の妻……それがおれたちのあらゆる不幸の原因さ」(12.1163)といった発言が流通するようにもなった。だがそのような見取り図には矛盾も多いし、そうした思考回路こそ問題にすべきかもしれない。「一人の女」にアイルランドの歴史の責任を担わせるとき、その思考様式からは「一人の男」の責任がまったく欠落してしまっている。少なくともブルームはそのような発想を抱くことはない。彼が疎外される要因である宗教に転じながら、ダブリンの状況を検討する必要がある。

### 参考文献

- Attridge, Derek, and Marjorie Howes, eds. *Semicolonial Joyce*. Cambridge: Cambridge University Press, 2000.
- Booker, M. Keith. *“Ulysses”, Capitalism, and Colonialism: Reading Joyce after the Cold War*. Connecticut: Greenwood Press, 2000.
- Carey, Tim. *Mountjoy: The Story of a Prison*. Cork: Collins Press, 2000.
- Chen, Vincent J. *Joyce, Race, and Empire*. Cambridge: Cambridge University Press, 1995.
- Collins, M. E. *History in the Making: Ireland 1868-1966*. Dublin: Educational Company, 1993.
- Costello, Peter. *Dublin Castle in the Life of the Irish Nation*. Dublin: Wolfhound press, 1999.
- Garvin, John. “James Joyce’s Municipal Background.” *Administration*, vol. 33, no. 4, 1985.
- Kiberd, Declan. *Irish Classics*. London: Granta Books, 2000.
- Lloyd, David. *Anomalous States: Irish Writing and the Post-colonial Moment*. Durham: Duke University Press, 1993.
- McBride, Lawrence. *The Greening of Dublin Castle: The Transformation of Bureaucratic and Judicial Personnel in Ireland, 1892-1922*. Washington: Catholic University of America Press, 1991.
- McCaffrey, Lawrence J. *The Irish Question: Two Centuries of Conflict*. Kentucky: University Press of Kentucky, 1995.
- McDowell, R. B. *The Irish Administration 1801-1914*. Connecticut: Greenwood Press, 1964.
- Nolan, Emer. *James Joyce and Nationalism*. London: Routledge, 1995.
- O’Brien, R. Barry. *Dublin Castle and the Irish People*. London: Kegan Paul, 1912.
- O’Leary, Desmond. *A History of Modern Ireland 1868-1966*. Dublin: Folens, 2000.
- Oram, Hugh. *The Newspaper Book: A History of Newspapers in Ireland, 1649-1983*. Dublin: MO Books, 1983.
- Pott, Willard. *Joyce and the Two Irelands*. Texas: University of Texas Press, 2000.
- Seamus, Breathnach. *The Irish Police: From Earliest Times to the Present Day*. Dublin: Anvil Books, 1974.
- Shloss, Carol. “Molly’s Resistance to the Union: Marriage and Colonialism in Dublin, 1904.” *Modern Fiction Studies*, vol. 35, no. 3 (1989): 529-541.
- Walker, Brian M. *Parliamentary Election Results in Ireland, 1801-1922*. Dublin: Royal Irish Academy, 1978.